

かないでね。私には、人に話すようなことは何もありません。お墓には『賤子』とだけほってください。

最後まで意識ははつきりしていました。夫の手をにぎりながら、

「ありがとうございます。」

というと、静かに息をひきとりました。明治二十九年二月十日、満三十二歳の短い生涯でした。

明治のはじめに新しい時代に生きる女子教育に目ざめた人、『小公子』をはじめとする翻訳を通して、日本では数少ないキリスト教文学者など、賤子は、その短い一生をほげしく生きぬきました。病気がちのからだでありながら、すぐれた仕事を残し、さらに、家庭にあつては、三人の子供をりっぱに育てました。世界的に有名なバイオリニストの巖本真理は、賤子の孫として、そのすぐれた才能をうけつぎました。